
ただ 好きなだけ

B E N I K O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ 好きなだけ

【Nコード】

N0491D

【作者名】

BENIKO

【あらすじ】

憧れだった仕事につけたユイコ。厳しい仕事だが、めげずに働くユイコに優しく接するユウキ。ユイコは、彼への想いに気付くが…

理由なんて分からない。本当の愛が何かも分からない。ただ　好きなだけだっ

はじめてみた時、おおきな人だな、と思った。

ただそれだけ。

私の名前は、林田ユイコ。

あれは昔から憧れだった、ヘアメイクの仕事に　ついたばかりの頃。
馴れない事ばかりでよく先輩には怒られたけど、私なりに　一生
懸命やってるつもりだった。

あの人と初めて会ったのは、まだこの仕事の右も左も分かってい
なかった、そんな頃。

地方のテレビ局では、ヘアメイクなんて二の次三の次…。番組
自体に制作費用が少ない場合、
まずヘアメイクやスタイリストから外されていく。

ヘアメイクやスタイリストの必要がないタレントを選んで、番組構
成したりする様だ。

そんななか、そのロケ番組、しかもレギュラーで、ヘアメイクがつ
けるのは、とてもありがたい事だった。

撮影は、いつもどこかのバーを昼間借りて、そこで収録するといっ

た感じのスタイルだった。

番組進行は三人。

オトボケなキャラクターの30歳半ばの芸人、コンタ。

少しワルっぽいイメージのある、20代後半位のタレント、中條ユウキ。

紅一点、主に進行する人物、名高マミは22歳。

その三人に、若手タレントや芸人が、独自でネタを調査し、報告するといった内容であった。

収録は三本撮り。時には四本撮りで、バーが開店するギリギリまで収録している、といった事も多かった。

ヘアメイクが必要なのは主に、名高マミ。

男性はあまりメイクに時間がかからないし、スタイルチェンジもない。

しかし女性の場合、収録ごとに衣装を代え、その衣装に合わせてヘアメイクもチェンジするといった事が必要になってくる。

特に地方に多い事だが、タイムスケジュールにメイク時間をもうけてくれない場合がある。

これはヘアメイクのいる仕事に、ディレクターが慣れていないせいで、そんな場合、まずメイク時間の確認、確保からしなければならぬ。

この現場では、いつもディレクターは、メイク時間をほぼ取ってはくれなかった。

何度もメイク時間の事を相談したが、あまり聞き入れてはもらえな

かった。

無理にスケジュールを組んでいる様で、聞き入れたくても出来ない、といったところだろうが…。

その為、私はいつも本番に遅れない様、慌ただしく動き回る他なかった。

本番中なら暇だろう、と思うかもしれないが、もちろんそんな事はない。モニターではどのように映っているか、髪形の乱れはないか、メイクのくずれはないか、キチンとチェックしなければならない。

カメラが止まっている間に、気付いたところがあれば、それをなおしに行く。本番が終れば、直ちにヘアメイクチェンジ。

昼食をとる暇など、いつもなかった。

それでも私は、憧れだった仕事に携わっている事が、嬉しくて仕方がなかった。

コンタと言う芸人には、以前に面識があった。

この番組の収録に初めてついた時、「君がついてくれる事になったの？よろしくね。」と言ってくれた。

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします！」

私は緊張しながらも、明るく答えた。

本来は歌手だそうだが、出す曲はあまりヒットはせず、地道にタレントをこなしている名高マミとはこの番組で初対面。

私が自己紹介をすると、「お世話になります。よろしくお願いします

す。」と、丁寧な返事をしてくれた。
年が近いのもあって、彼女とはすぐに打ち解けた。

中條ユウキ。彼にも以前、一度だけ会った事があった。先輩から、
「ユウキさんはいつも、ヘアだけさせて頂くけど、メイクはされな
いから。でも、本番前にお粉フェイスパウダーで押さえさせてはくれるから。」
という情報を得て、本番前にユウキに近寄り、「失礼します。お顔
押さえさせて頂いてよろしいですか？」と聞いた。
「帽子がぶってるし、今日はいいです。」
と、その日はあっさり断られた。

おおきな人だな。
と思った。

180cmはあるのかな…。

ボンヤリと、そんな事を考えた。

ただ　それだけだった。

でも、なぜかハッキリと覚えていた。

ユウキの事は、ヘアメイクになる前からテレビを見て知ってはいた。
もちろん、ファンではないし、特別なにか思い入れのあるタレント
でもなかった。

収録が重なることに、なぜだか不思議な感情が芽生えてきたのを覚えてる。

少しワルっぽいイメージのユウキは、とにかく優しくかった。

物腰も柔らかかった。

どんなに無理難題な収録状況でも、愚痴一つこぼさなかった私を気に入ってくれたのか、私を見る目が暖かった。と、私は感じた。バーでの収録な為、メイク中は照明が暗く、スタッフに照明の要求をしたが、断られそうで困っている時には、助けてくれたりした。大変な現場だったが、月に一度程のこの番組収録が、私はすごく楽しみになっていた。

その日は、年内最後の収録という事で、本番終了後に、そのバーを借りきって、忘年会をする事になっていた。

収録も終わり、メイク道具の片付けも終え、私も忘年会に参加した。小さなダンスホールに、適当に椅子やテーブルを並べ、各々好きな席へつく。

私はマミさんの隣に腰をおろした。

マミさんと少し話をしながら、私もビールを飲んだ。

すでに、少しできあがっているコンタさんが、私の前に座り、いつもの感じでオチャラケた。

スタッフの方も、時々やって来ては、

「飲んで飲んで！今日は無礼講だから！」なんて言いながら、その場を盛り上げていた。

私はユウキさんを探していた。

もちろん、席を立つでもなく、キョロキョロ見回す事もなく…
ただいつも、今どこにいるのかを把握していた。

…彼が私たちのそばにやって来た。

胸がドキン…となった。

もちろん私は、平然とした態度でいた。

「飲んでる？」

優しく、彼が聞いた。

「はい、飲んでます！」

私はできるだけ、明るく答えた。

ドキドキしていた。

「何か困ってる事はない？何かあったら、いつでも俺に言ってきて。
俺が守ってあげるから。」

イキナリの言葉に、私はすごく驚いた。
ドキドキはピークになった。

そばにいたコンタさんが、

「ちょっと、何そんな事言っただよ。お前だけカッコつけてさあ？！」と、少し悔しそうに言った。

「本当にそう思うから。彼女はいつも、俺たちタレントの事を一番に考えてくれてる。それは見てたら、分かるんだ。そんな子は、俺たちタレントが守ってやらなくちゃいけないって、そう思うんだ。」
真剣な眼差しで、彼は答えた。

何も言えなかった。

去っていく彼の後ろ姿を見る事もできなかった。
ただ、ただ、嬉しかった。

「僕も守ってあげるよ」おどけながら言うコンタさんの言葉は、
もはや耳には入らなかった。

「私はユウキさんの事が好きなんだ…。」

そう気付いたのは、その事があってからかも知れない。

それからは、彼の事が頭いっぱいになった。

考えるだけで、胸がときめいた。

まるで、初めての恋をした少女の様な自分自身に、びっくりもした。

ドコが好き？

何が良い？

そんな事、分からない。

ただ　好きだけ。

それしかなかった。

理由なんてなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491d/>

ただ 好きだけ

2010年12月16日02時34分発行